

Title	養護施設児の自尊感情と精神的健康の関連について
Author(s)	渡辺, 美那子
Citation	大阪大学臨床老年行動学年報. 2000, 5, p. 54-62
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/4105">https://doi.org/10.18910/4105</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 養護施設児の自尊感情と精神的健康の関連について

渡辺美那子

## 【はじめに】

児童養護施設で生活する子どもは、複雑な対象喪失を経験している。近親者の死や別離、住み慣れた環境との別れ、一部の身体機能の喪失などである。家族の成員と何らかの形で離れることは、誰にとっても非常に耐え難いことであり、一般的に幼少期の喪失体験は、子どもの人格形成に多大な影響を及ぼすとされる（藤野，1996）。

## 1. 対象喪失の心身におよぼす影響

対象喪失反応、つまり喪失体験の及ぼす精神的な影響について興味深い知見が数多く得られている。例えば北村（1984）は、臨床医学的に抑うつ症状を呈していると診断された群（患者群）と精神的に健康な群（健常群）とを比較し、患者群の方が、10歳以前の両親のいずれかとの死別もしくは別離という喪失体験を経験している率が高いことを示している。その上で、5～10歳までが喪失体験によって抑うつ状態の素因が形成される臨界期であることを示唆している。また上林・中田・藤井・北・斎藤・佐藤・森岡・生地・梶山（1992）は、心因性の障害を持つ子どもは持たない子どもに比べて、ストレスフルなライフイベントを明らかに多く経験していることを示している。これらは前青年期に経験する喪失体験が、心身に悪影響を及ぼすことを示したものであるといえよう。

一方で、離婚・別居は一方の親が子と共に選択する新生活への解放であり、離婚・別居後、親子は心身共に安定するという立場から、離婚・別居を「子の救済」の手段とみなす考え方も現れている（下夷，1989）。そのように、全ての喪失体験がマイナスの効果をもたらすとは限らないとの指摘（土居・鈴木・田頭・石川，1985）も見られる。そのことから、人格に対する幼少期の喪失体験による影響は、人格をより成熟させるなどのプラス方向、非行・犯罪にはしらせる、健康に害を及ぼすなどのマイナス方向、双方の作用を持つと考えられる。明暗を分ける原因としては、喪失前の対象との関係、喪失の様態、子どものパーソナリティ、喪失後の愛着対象のあり方など、様々なものが考えられる。本研究では、パーソナリティ特性を取り上げ、その中でも筆者の興味をひく自尊感情（self-esteem）に焦点を当てる。

## 2. 児童養護施設児の自尊感情

一般的に、養護施設で生活する子ども達は、自尊感情が低いという通念が、養護施設に関わる大人達の間には存在している（繁多，1997；中原・藤本・阪本・農野・谷・岡崎，1997）。しかし、子ども達の自尊感情が低いという心象を受けたとしても、皆が一様に自尊心が低いというわけではないと考えられる。自尊感情の高い子どももいることが予想されるが、人間関係において何が自尊感情を高めるのだろうか。Coopersmith（1967）は、self-esteemを個人が自分自身について持っている価値の程度についての主観的な判断であると

定義している。つまり、自分の価値や能力に対する自分自身の評価であり、自分自身を価値ある、有能な存在と感じる程度である（川西, 1995）。本研究では鈴木（1989）にならい、自尊感情は自己の能力全般への確信と、それに基づく態度を表すものとする。

鈴木（1989）は、ストレスに対処する資源として、自信・自尊感情を取り上げている。そしてその研究の中で、自信・自尊感情の高さが心理的ストレス反応を抑制するという結果を示している。同様に川西（1995）は、self-esteemとコーピング、ストレス反応との関連を研究し、self-esteemが低い者は、日常生活においてストレスを感じやすいことを見出している。またPearlin, Lieberman, Menaghan, & Mullan (1981)、Pertrie & Rotheram (1982)、DeLongis, Folkman & Lasarus (1988) も同様に、self-esteemのストレス反応への正の影響を見出している。中原・藤本・阪本他（1997）による養護施設児を対象とした調査では、自己評価の良い子どもが多いのが特徴であるが、逆に自虐的とも言えるぐらいに自己評価の低い子どもが多いのも特徴であるとされている。自尊感情は自己評価の一側面であると考えられるので、養護施設児において、自尊感情の精神的健康に及ぼす影響について検討する必要があると考えられる。

養護施設で生活する子どもに対する心のケアという観点からのこれまでの先行研究は、実態調査や、施設職員らによる経験に基づく提言、臨床心理学的見地からの事例研究がほとんどである。しかし本研究では、従来の先行研究とは視点を変え、計量的研究を目指した調査を行う。

本研究では、養護施設児の自尊感情（self-esteem）と精神的健康の関連について計量的に検討することを目的とする。

## 【方法】

### 1. 対象及び手続き

調査は質問紙法で行った。被験者の属性を測定するための調査票を、児童ホームの職員に記入してもらった。被験者の属性とデータを一致させる必要があるため、ナンバリング方式をとった。また調査に際し、項目の理解度を高めるために、検査者が項目を読み上げて対象者（子ども）が回答していく方法を採用した。調査に際し、検査者が見ず知らずの者であると子ども達の緊張が高まり、回答不能となる可能性がある。そのため検査者はホームの保育士か指導員の方に依頼した。

調査対象は、児童養護施設で生活する中学生54名（男性36名、女性18名）であり、被験者の属性は以下の通りである（Table1）。調査に御協力いただいたのは、大阪府内の2施設、兵庫県下の1施設であった。いずれも調査に対する了解を得た後、郵送にて行った。調査は1999年10月～11月上旬に行われた。

Table1：被験者の属性

	平均	標準偏差	最小値	最大値
年齢	13歳6ヶ月	0.92	12歳	15歳
入所年齢	7歳9ヶ月	56.12	2歳3ヶ月	15歳2ヶ月
入所期間	6年3ヶ月	52.79	2ヶ月	13年8ヶ月

## 2. 調査内容

使用尺度は、被験者の属性に関する項目、自尊感情に関する項目、精神的健康度に関する項目である。以下に使用尺度について詳しく述べていく。

### a) 被験者の属性

調査対象となる子どもの属性について、主に児童ホームの職員らに尋ねた。子どもに対しては性別、年齢のみを尋ねた。入所期間、入所時の年齢、入所経路、入所理由、面会・外泊の頻度については、担当保育士に尋ねた。

属性に関する質問項目は、『日本子ども資料年鑑 家族と子どもの福祉VI』（社会福祉法人恩賜財団母子愛育会 日本総合愛育研究所, 1994）を参考に筆者が作成した。回答を簡便化するために、以下のように状況を設定し、チェックをしてもらうようにした。入所経路については、以下の7つの選択肢を用意した。①家庭から、②乳児院から、③養護施設から、④他の児童福祉施設から、⑤里親家庭から、⑥家庭裁判所から、⑦その他、である。

また入所理由について、以下の10つの選択肢を用意した。①父母の死亡、②父母の行方不明、③父母の離婚、④父母の入院、⑤父母の就労、⑥父母の精神的問題、⑦父母の虐待・放任、⑧破産などの経済的理由、⑨児童の問題による看護困難、⑩その他、である。

さらに面会・外泊の頻度については、それぞれ、以下の8つの選択肢を用意した。①週に1～2回、②月に1～2回、③二～三ヶ月に1～2回、④半年に1～2回、⑤年に1～2回、⑥二～三年に1～2回、⑦まったくない、⑧その他、である。

### b) 自尊感情

鈴木（1989）の用いた自尊に関する項目（8項目）を使用した。これらの項目は、自己の能力全般への確信とそれに基づく態度を測定することを目的とする。各項目について、5件法で評定を求める。高得点であるほど、自尊感情（self-esteem）が高いことを示している。

### c) 精神的健康度

日本版精神的健康調査票GHQ（中川・大坊, 1985）の12項目版（福西, 1990）を用いた。それぞれの項目について、4件法で回答を求めた。採点は、GHQ採点法（4つの選択肢の左から順に0-0-1-1点を与え、12点満点）ではなく、得点が正規分布しやすいようにLikert採点法（4つの選択肢の左から順に0-1-2-3点を与える、36点満点）により評価した。低得点であるほど、精神的健康が良好であることを示している。

## 3. データ解析

データ解析には統計パッケージSPSSを用いた（SPSS Inc., 1993a ; SPSS Inc., 1993b）。

【結果】

1. 被験者の属性について

保育士に対して、子どもの属性についての質問を行った。以下に入所経路 (Figure1)、

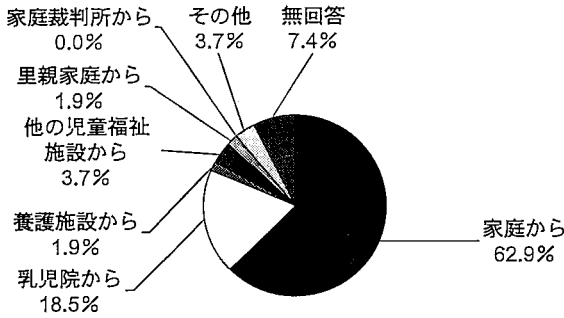


Figure1 : 入所経路

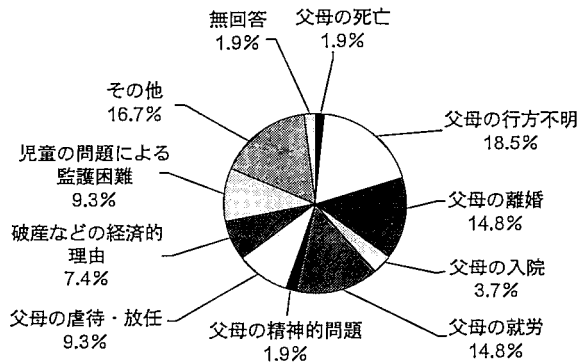


Figure2 : 入所理由

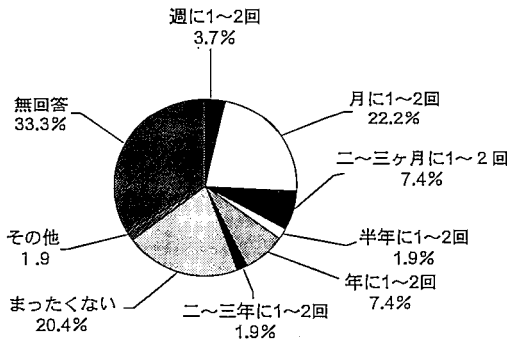


Figure3 : 面会の頻度

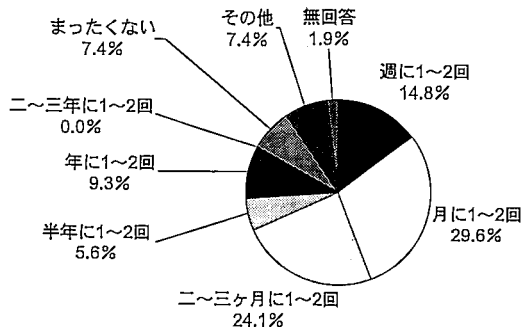


Figure4 : 外泊の頻度

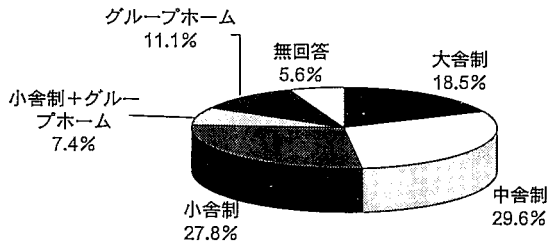


Figure5 : 施設の形態

入所理由 (Figure2)、面会・外泊の頻度 (Figure3, Figure4)、養護施設の形態 (Figure5) の割合を示す。入所経路、入所理由のそれぞれの割合は、厚生省児童家庭局による「養護児童等実態調査結果の概要」(社会福祉法人恩賜財団母子愛育会 日本総合愛育研究所, 1994) におけるものとほぼ一致するものであった。そのことから、本研究における被験者は母集団にほぼ対応するものと考えられる。

## 2. 属性、自尊感情、精神的健康との相関関係について

精神的健康、自尊感情の  $\alpha$  係数は、それぞれ精神的健康が.77、自尊感情が.61と、十分な水準であったので、それぞれの合計点をその得点とした。そして被験者の属性、精神的健康 (Mean=16.41, SD=6.22) と、自尊得点 (Mean=9.72, SD=4.14) との相関を、Pearsonの積率相関分析により算出した (Table 2)。

Table2 : 属性、自尊、精神的健康の相関関係

	入所年齢	入所期間	精神的健康	Mean	(SD)	$\alpha$
入所年齢	1.00			7歳9ヶ月	(56.12)	
入所期間	-.98**	1.00		6年3ヶ月	(52.79)	
精神的健康	.05	-.02	1.00	16.41	(6.22)	.77
自尊	-.00	.05	-.32*	9.72	(4.14)	.61

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .001$

### 3. 自尊感情の高低について

被験者の自尊得点は、3点から21点で、平均9.71点 (SD=3.82) であった。そのうち、上位25%の境界にあたる得点 (12点) 以上の者を自尊高群、下位25%の境界にあたる得点 (7点) 以下の者を自尊低群とした。そして8点以上11点以下の者は中位群とした。自尊高群と低群、中位群の自尊得点の平均値と標準偏差は、Table 3の通りである。一元配置分散分析の結果、三群間の自尊得点に有意差のあることが示された。性差に関して、カイ二乗検定を行った結果、有意な偏りは見られなかった。また年齢について、一元配置分散分析を行った結果、三群間に有意差は見出されなかった。

一方、精神的健康について、同様に一元配置分散分析を行った結果、自尊高群は自尊低群よりも、有意に精神的健康度が低いことが示された。すなわち、自尊高群の方が、低群よりも精神的健康が良好であることが見出された。

Table3 : 自尊高群、低群および中位群の自尊得点と性別、年齢、精神的健康

Variables	自尊高群 (n=16)	中位群 (n=20)	自尊低群 (n=18)	Analysis
	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	
自尊得点	14.9 (2.6)	9.4 (0.9)	5.5 (1.6)	F=118.4, p<.0001 高群>中位群>低群
	n (%)	n (%)	n (%)	
性別 男性	11 (20.4)	13 (24.1)	12 (22.2)	$\chi^2=0.06, df=2, ns$
女性	5 (9.3)	7 (13.0)	6 (11.1)	
	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	
年齢 (歳)	13.8 (1.0)	13.6 (1.1)	13.5 (0.71)	F = .34, p > .70
精神的健康	13.3 (5.3)	16.8 (6.0)	18.7 (6.3)	F = 3.58, p < .05 高群<低群

### 【考察】

#### 1. 自尊感情と精神的健康の関連について

本研究では、対象喪失を経験している養護施設児について、自尊感情と精神的健康との関連を明らかにすることを目的とした。結果より、自尊感情の高い子どもは、精神的健康度も良好であった。これは、DeLongis, Folkman & Lazarus (1988) のself-esteemとストレスに引き続く健康状態や気分との関係を検討した研究や樽木 (1992) の研究において、self-esteemが高い者は低い者に比べて、心理的・身体的症状が少なかったという結果を裏付けるものである。また鈴木 (1989)、川西 (1995) による同様の研究結果とも一致するものである。

愛着対象との関係とself-esteemについては、興味深い研究結果が多く得られている。Coopersmith (1967) は、自尊感情が重要な他者からの尊敬、受容や社会的地位によって高められると仮定し、両親の養育行動と子どもの自尊感情の関係について分析を行った。それによれば、高い自尊感情を持っている子どもの両親は、子どもに関心を寄せ、注意深

い。そして両親は、適当であり、適切であると信じている線に沿って、子ども達の世界を構造化していること、その確立した構造内で、比較的大きな自由を許すことが明らかにした。また石川(1981)は、両親から情緒的に支持され、自律性を尊重されていると認知している子どもほど、そうでない子どもよりも、自尊感情が高いことを見出している。ここでの“両親”を、子どもにとっての愛着対象と考えると、養護施設では保育士がその役割を担っていると考えられる。つまり、保育士から情緒的に支持され、自律性を尊重されていると認知している子どもほど、自尊感情は高まると考えられる。

それらのことから、自尊感情が高いということは、現在の生活の場において、安定した自分の居場所を見つけていることを示すと思われる (Coopersmith, 1967 ; 石川, 1981 ; 蘭, 1986)。対象喪失を経験した養護施設児にとって安定した環境を見出すことは、愛着行動の再構成に非常に重要である。すなわちこの結果は、喪失体験、環境の大きな変化を経験した後、その悲嘆を乗り越え、愛着対象を同定することができた者ほど、環境に適応できていることを示唆していると考えられる。同時に自尊感情が、対象喪失による悲嘆を和らげる又は、健全な悲哀を歩む手助けをしていることが考えられる。そのことから逆に、乳幼児期・前青年期の子どもに対して、自尊感情が高まるように安定した環境、新たな愛着対象の同定を助けるような働きかけをすべきであるといえる。

## 2. 今後の課題

先に述べたように、養護施設児に対する心のケアという観点からの先行研究は、実態調査や事例研究がほとんどである。対象喪失経験が子どもに与えた影響や、環境の安定性を測るには、里親や児童相談所の職員との関係も考慮に入れなければならないと考えられる。そのためには生育歴の測定、担当保育士との関係の考慮は重要だが、子ども達のプライバシーの保護は絶対であるので、測定に限界が出てくる。しかし児童養護施設児の精神的安定をはかる上で、これらのことは軽視できない。そのため、今後この要因の変数化を検討することが必要であろう。

また最近、児童生徒の様々な社会的不適応が大きな社会問題として取り上げられる (大迫, 1999 ; 岡安・嶋田・坂野, 1993)。児童生徒の学校などへの不適応、反社会的行動を予防し、心身の健康の維持・増進をねらった健康心理学的観点から、児童生徒の心理社会的ストレスとメンタルヘルスとの関連について明らかにしようとする試みが多くなされている (大迫, 1999 ; 岡安・嶋田・坂野, 1993 ; 谷口・浦, 1996 ; 森・堀野, 1992 ; 森, 1997)。その際、子どものパーソナリティを取り上げているものも多く見られる。このように健康心理学的観点から見ても、今回の計量的研究は意義のあるものと考えられる。しかし児童養護施設における問題は個別性が強いので、計量化するだけでは当然不十分である。個々の事例の多様性を考慮することと、計量的研究とを並行して行うことが望ましいと考えられる。

### 【結語】

本研究により、対象喪失を経験している養護施設児について、幾つかの示唆を得ることができた。養護問題においては子どもの処遇はもちろん、子どもを取り巻く関係機関との連携、職員のストレスに対する対処、子どもに合わせたケアプランの作成とそれに基づく



評価など、課題は山積みである（社会福祉法人 全国社会福祉協議会 児童養護施設職員の研修のあり方に関する検討委員会, 1999）。そのような現状において、また養護施設児を対象とした事例研究が発達していることを考え合わせても、今回のような調査に基づく計量的研究は必要かつ急務であると考えられる。また心理療法によって内的世界に定期的に関わりながら、別の次元で日常的なサポートに焦点を当てることも必要であると考えられる。調査の限界もあるが、そこから得られるものは大きいと考えられ、養護問題の改善に向けてさらなる調査と検討が期待される。

#### <引用・参考文献>

- ・ 蘭千尋 1986 対人行動の心理学 対人行動研究会(編) 誠信書房
- ・ Coopersmith, S. 1967 *The antecedents of self-esteem*, San Francisco:W.H.Freeman.
- ・ DeLongis, A., Folkman, S. & Lazarus, R. S. 1988 The Impact of Daily Stress on Health and Mood : Psychological and Social Resources as Mediators. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 486-495.
- ・ 土居健郎、鈴木浩二、田頭寿子、石川元 1985 第3研究委員会報告・崩壊家族の臨床的研究—家族の崩壊と子どもの精神健康— 社会福祉法人真生会 社会福祉研究所(編) 母子研究、No.6, 17-20.
- ・ 藤野京子 1996 非行少年のストレスについて 教育心理学研究、44, 278-286.
- ・ 福西勇夫 1990 日本版 General Health Questionnaire (GHQ) の cut-off point 心理臨床、3, 3, 228-234.
- ・ 石川嘉津子 1981 Self-esteemと両親像 日本心理学会第45回大会発表論文集、573.
- ・ 上林靖子、中田洋二郎、藤井和子、北道子、斎藤万比古、佐藤至子、森岡由起子、生地新、梶山有 1992 ライフイベントと児童児春期の情緒の障害に関する研究 社会精神医学、15, 1, 51-59.
- ・ 川西陽子 1995 セルフ・エスティームと心理的ストレスの関係 健康心理学研究、8, 1, 22-30.
- ・ 北村俊則 1984 児童期の喪失体験と抑うつ状態—マッチド・ペアによる研究— 特集：社会・文化精神医学における事例研究—躁うつ病 社会精神医学、7, 2, 114-118.・ 森和代 1997 児童の達成動機とソーシャル・サポート(自己知覚、親評定) 社会福祉法人真生会 社会福祉研究所(編) 母子研究、No.18.
- ・ 森和代、堀野緑 1992 児童のソーシャル・サポートに関する一研究 教育心理学研究、40, 4, 402-410.・ 森田喜治 1983 養護施設入所児童の心理的特徴 —PF Study & Baum Test— 大阪教育大学障害児教育研究紀要、6, 89-101.
- ・ 中川泰彬、大坊郁夫 1985 日本版 GHQ精神健康調査票手引 日本文化科学社
- ・ 中原康博、藤本勝彦、阪本博寿、農野寛治、谷美加、岡崎ゆみ 1997 児童養護施設の子どもの心のケアを考える —生活意識アンケート、親子関係質問紙を通して— 安田生命社会事業団研究助成論文集、33, 191-197.
- ・ 岡安孝弘、嶋田洋徳、坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究、41, 3, 302-312.
- ・ 大西俊江、山下由利子、伊藤俊子、原智子、林光玉、足立富美子 1994 養護施設児に

- 対する心理学的援助 島根大学教育学部紀要(人文・社会科学)、28, 51-60.
- ・大迫秀樹 1999 反社会的行動の認知的ストレス理論による解明とその治療教育過程—児童福祉施設における小学生の事例—健康心理学研究、12, 1, 59-69.
  - ・Pearlin, L. I., Lieberman, M. A., Menaghan, E. G. & Mullan, J. I. 1981 The stress process. *Journal of Health and Social Behavior*, 22, 337-356.
  - ・Pertrie, K. & Rotheram, M. J. 1982 Insulators against stress : Self-esteem and Assertiveness. *Psychological Reports*, 50, 963-966.
  - ・社会福祉法人 恩賜財団母子愛育会 日本総合愛育研究所(編) 1994 日本子ども資料年鑑 第4巻IV.家族と子どもの福祉 KTC中央出版
  - ・社会福祉法人 全国社会福祉協議会 児童養護施設職員の研修のあり方に関する検討委員会(編) 1999 児童養護施設における非虐待児処遇の実際(児童福祉施設職員の非虐待児等処遇研修事業報告書)
  - ・繁多進 1997 幼少期の被虐待経験がその後に及ぼす影響 社会福祉法人真生会 社会福祉研究所(編) 母子研究、No.18, 69-79.
  - ・下夷美幸 1989 離婚と子供の監護—子の福祉の観点から—看護研究、22, 2, 25-36.
  - ・SPSS Inc. 1993a SPSS Base System 統計編, Release 6. x. SPSS Inc.
  - ・SPSS Inc. 1993b SPSS Professional Statistics, Release 6. x. SPSS Inc.
  - ・鈴木真悟 1989 中学生の心理的ストレスと非行との関連に関する研究 2.対処資源および心理的ストレス反応と非行体験度との関連性 科学警察研究所報告防犯少年編、30, 1, 13-27.
  - ・谷口弘一、浦光博 1996 サポートの授受と精神的健康の関連に関する発達の研究、日本グループ・ダイナミックス学会第44回大会発表論文集、32-35.
  - ・樽木靖夫 1992 中学生の自己評価に及ぼす担任教師によるフィードバックの効果 教育心理学研究、40, 2, 130-137.